令和２年（2020）
阿づまの光
5月号・Majo

【金竜海土、金字松釉】

教主さまお作　「中和（ちゅうわ）」

題字出口直日

通巻第６１４号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

みろくの世への大きな布石となって

愛善宣教課主事　柿崎哲男

一昨年、信濃町の展望レストランの窓から、建設途中の国立競技場を眺める機会がありました。「あの大きなスタジアムで、世界中のトップ選手が競技をするのだなぁ」と、想像し、胸を躍らせました。残念ながら、東京オリンピックは延期となりましたが、平和の象徴として無事に開催されることを願います。

オリンピックに関連して、若いころの懐かしい体験を思い出します。80年代、「冬のオリンピックを旭川へ」という、冬季五輪の招致運動がありました。日本での立候補都市を目指し、部活動を通じて地元旭川市でこの運動に参加していましたが、候補地は長野市に決定し、残念ながら大雪の麓の街に五輪旗が翻ることはありませんでした。

冬季五輪の招致自体は達成されませんでしたが、目標に向かって努力し、協力し合う過程は、当時の自分に大きな力を与えていただけたと感じています。

今、世界中の人々が、新型コロナウイルスと真剣に対峙しています。終息に向かって努力し、協力し合うこと。一人ひとりができることは限られていますが、周囲のことを思いやりながら手を携えることで、打開されてゆくのだと思います。密集を避ける、人との接触を最小限に、マスク、手洗い。自分のためではなく、大切な誰かのため。こんな思いで励行するものではないでしょうか。

そして、時代の分水嶺のような現況は、その先に、何があるのでしょうか。

欧州の方が医療従事者に拍手でエールを送っている報道を見ました。この行いは世界中に拡散していきました。私は「これだ！」と感じました。国と国、人と人が信頼しあい協力し合うことで、大きな力を与えていただけます。この大難を乗り越えた先には、国境を越えた大きな絆が待っています。今、与えられている現実は、世界平和・みろくの世への大きな布石と捉えたいのです。神さまは越えられない試練はお与えにならないと示されていますから。

「国境もあらんや人種も思わんや鳥獣も救わむとぞ思ふ」（出口日出麿先生）

今こそ、大神さまに感謝とお詫びの誠を真剣に捧げつつ、今できることを実践しましょう。

今月の聖言

試（こころ）みにあふも憂（うれ）ひの雨（あめ）ふるも
悔（くや）まず怯（お）ぢず神（かみ）にまかせよ

出口王仁三郎聖師

日本に生まれた幸せ

～今、私たちに求められているもの～

日本の文化や素晴らしさについて質問されたら、皆さんはどのように答えられますか？日本に生を受けながら、意外と日本について知らないことに気付かされます。日ごろ、アジアを中心とする多くの外国人と接する合田千華先生に、日本の魅力を語っていただきました。

私の会社では、主に日本で就職したいというアジアを中心とした留学生たちを受け入れ、就職を斡旋し、実際に働くための実務能力を身につける指導を行っています。特に日本で働くわけですから、彼らに日本の文化や習慣についても理解していただく必要があります。

日ごろ、彼らと接する中で、私自身、あらためて日本の文化や伝統の素晴らしさに気付かされることがあり、その一端をお話できればと思います。

海外と日本企業の相違

欧米の雇用システムは、ジョブディスクリプションと言って、職務の内容や範囲、目的などが、詳細にわたって明確に決められており、それに基づいて、あなたの仕事はこの範囲で給料はこれだけ支払いますと、契約を交わします。被雇用者は契約通りに仕事をこなしますが、契約以外のことは絶対にしません。例えば日本では、人手が足らなそうだと思ったら、何も言わなくても手伝いますが、海外では手伝おうとしません。むしろ手伝ってはいけないと思っているくらいです。もし手伝うのであれば別途契約をしてください、と言われます。それが海外企業の常識です。

日本ではジョブディスクリプションはほとんど浸透していません。会社に入れば、会社のために何でもするのが当たり前です。私どもの研修生が日本の企業に就職して一番戸惑うのがこの点で、自分のやるべきことが明確に決められていないので、暗闇の中で仕事をしているようなものだと言います。

日本の学校では、放課後、みんなで掃除をしますが、海外はしないところがほとんどです。ヨーロッパの私立学校で、日本のマナーの良さはそういうところにあるのでは、ということで取り入れている学校もあるようですが、普通は掃除担当の用務員がすることになっています。よくサッカーのワールドカップのあとに日本人がゴミを片付けて帰る姿が絶賛されていますが、一方では、掃除を担当している人の仕事を奪ってしまうことになるという批判の声も出ています。

また、日本の企業では人事異動が当然のように行われます。昨日まで経理をしていた人が、明日から営業に回るということは珍しいことではありません。しかし、海外では、自分の仕事の専門性を高めていくということをしますので、一つの決められた仕事をひたすらこなしていきます。だから経験を積み、良い成果を収めたら、当然、その人の給料はどんどんと増えていきます。

日本ではチームワークを大事にしますので、どんなに個人の成績が良くても、その人が一人でやったのではなく、皆のサポートがあったからだと理解します。海外からの労働者には、このことが理解できませんので、日本の職場環境になかなか馴染めないのです。

「暗黙の了解」

私どもの研修生に必ず話すのは、日本人は、まず相手のことを考え、その次に自分のことを考える文化ですよ、ということです。例えば、日本では言いたいことがあっても、全部を言いません。相手の立場を考えながら発言します。海外ではその逆で、まず自分のことを優先して考え、自分の主張をはっきりと伝えます。そうした環境で育ってきましたので、相手のことを先に考えなさいと言っても容易なことではありません。チームワークを重んじることは、もちろん理解はしてくれるのですが、いざとなるとすぐに自己主張を始めるのです。

コミュニケーションについての考え方にも違いがあります。留学生の中には、「私は3カ国語が話せるので、コミュニケーションは完璧です」と、主張する生徒がいます。しかし、語学がいくら堪能だからといってコミュニケーションとは少し違うというのが日本人の感覚です。日本の企業が教えるコミュニケーションとは、相手に対する思いやりの心や気遣いです。その中からコミュニケーションやマナーが生まれてくると捉えています。これを外国人労働者に説明しても、すぐには理解できません。コミュニケーションやマナーは言葉がすべてだと考えているからです。

日本では、昔から「暗黙の了解」ということを言います。「行間を読む」とか、「空気を読み取る」など、言わずとも相手の気持ちを察する、理解する、ということを大事にしてきました。この見えないところから相手の心を慮るという習慣は、世界的にも非常に稀な文化であり、日本人の優れたスキルだと思います。

実は、先程から申し上げているジョブディスクリプションやコミュニケーション、マナーに対する日本人と外国人との理解の違いは、こうした言わなくても相手の心を思いやる気持ち、相手の心を汲み取る配慮ができるかどうかの違いだと思います。日本人の性質には、そうした

～21世紀・生きがい講座～

合田千華（ごうだちか）
あじあ研修株式会社代表

何も言わなくても相手を思いやる気持ちが自然と備わっていると思うのです。

世界最古の国・日本

ところで、日本には、海外からあらゆるものを受け入れ、それらを日本独自の文化を加えて新たなものを生み出してきた歴史があります。日本の食文化もそうです。例えば、私は羊羹が大好きですが、これは中国で羊の羹（あつもの）の料理が原型となっているそうです。スープが冷めるとゼラチン状のものができますが、これを鎌倉から室町時代にかけて禅僧によって日本に伝えられました。禅宗では肉食が禁じられていますので、精進料理として小豆を用いたものが羊羹の原型になったと伝えられています。

また、正倉院という建物をご存知と思います。中にある宝物は中国やインドなど、大陸から日本に渡ってきた貴重な文化財です。ところが、この宝物の発祥地である中国の研究者が見せてほしいと日本にやってくるのです。それは中国では過去、国同士が争い、支配者が変わるたびに前の支配者の文化をことごとく滅ぼしてきました。そのために当時の貴重な文化財が残っていないのです。日本は時代が変わってもそれらを大事に守ってきたので、当時のものがきちんと残されているわけです。

なぜそのように伝統や文化が守られてきたのでしょうか。それは長い歴史の中で、日本という国はいつの時代も日本であり、同じ民族が定住してきたからです。他国は支配者が変わるたびに国が変わっています。日本は、神武天皇以来、王朝が一度も滅びることなく続く世界最古の国です。これは世界的にみても奇跡といっても過言ではありません。

言語もそうです。日本人は文字を持たなかった時代がありました。そこに中国から漢字が入ってきて、その漢字から仮名文字を生み出して独自の文化としました。漢字の文化に染まってもおかしくなかった時代に、漢字を使って日本独自の文字にしてしまったのです。世界には、英語が入ってきて自国の言葉が衰退してしまった国があります。アイルランドもその国の一つです。アイルランド語があるのですが、英語が入ってくると、2カ国語を話すバイリンガルが増えてきました。ところが次第に英語を主とする世代が増えてきて、アイルランド語を話す人がほとんど居なくなってしまいました。

日本も人口が減少していますから、この先、もし日本が移民を受け入れるようになるとバイリンガルが増えてきて、やがて英語を選択する世代になり、日本語は消滅に向かうだろうという人もいます。しかし私はそうは思いません。なぜなら、もし言語が入れ替わるなら、日本に漢字が入ってきたタイミングですでに変わっていたはずです。ところが日本人は漢字を利用して仮名文字を生み出し日本語を守ってきました。ですからいくらバイリンガルが増えてきても、日本語はなくならないと信じています。

日本語の素晴らしさ

私の会社では海外の人が多く働いていますが、社内の方針として取り決めていることは、共通言語は必ず日本語を使うということです。国や民族の違いにはこだわっていませんが、日本語という言語にはこだわっています。なぜなら、日本人の言葉のやり取りの中で、相手の言いたいことを察しながら、自分として何ができるのかということを考える、相手を思いやる気持ちを理解するためです。これは日本人の特徴ではなく、日本語が持っている文化だからです。

日本語は、同じ言葉でもたくさんの意味があり、対人関係や周辺の状況によって、表現を微妙に使い分けます。とても繊細な言語です。文脈から理解できるときは、主語を省くこともよくあります。婉曲な表現にも適切に対応することができます。はっきり言ったほうが分かりやすいのでしょうが、それを言い過ぎず、角が立たないように穏やかに理解し合う、そこが日本語の素晴らしさです。それを大切にしたい、海外の人にも理解してほしい、そういう思いでいます。

すべてを言わずに理解し合える日本の文化は、日本人が何千年と培ってきたコミュニケーションツールです。グローバルスタンダードとは真逆ではありますが、それに立ち向かっていけるだけの強さがあると考えます。

日本の言葉に「和える」という言葉があります。これは、それぞれの特徴を活かしながら、一つの風味を醸し出します。ゴチャ混ぜではなく、ちょうどいい塩梅で「和える」ことによって、調和を保っていくのです。

これは日本人が長年、培ってきた宝物であり、皆さんの心の中に息づいているものです。その精神を忘れることなく、これからも日本の誇るべき文化として継承していかなければと思います。

掲載文は、令和元年10月16日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑春季大祭

東光苑春季大祭は、4月12日午前10時30分から、斎主・猪子恒東京宣教センター長のもと執行され、5人（係員含め20人）が参拝した。

当日は、国内でも拡大している新型コロナウイルス感染予防のため、参拝の自粛を呼びかけた中での祭典執行となったが、インターネット回線を通じて全国に配信され、映像を通して遠隔地からも遥拝された。祭員は予定していた各主会の祭務部長から本部職員に変更、大本神諭拝読は菊池まゆみ総務管理課主任が担当し、添釜や祭典後の諸行事、直会も中止され、祭典のみが厳粛に執行された。

祭典後、猪子センター長があいさつに立ち、「新型コロナウイルス肺炎の為に世界中が大混乱し、日本でも東京を始めとする大都会を中心に甚大な影響を受けつつある。このような時世の中、大祭の祝詞で一刻も早く終息に向かうよう奏上させていただいた。聖師さまのお歌の中に『大三災小三災の頻発も人の心の反映なりけり』『天地の道明らかになるときは天変地妖あとを絶つべし』を拝唱させていただくと、まさに現代の大峠を予言されていた事のように思う。私たち現代人が今の生き方の誤りに気付き、神さまの御心に近づかないと天変地異は治まらないという事になろうかと思う。このような苦難を乗り越えて私たち人類はみろくの世に近づいていくことになる。私たちは教主さまに神習い、神さまにひたすらにお祈りをさせていただき、軽々しく行動することを慎み、各自で出来る最善を尽くしていく事が大切である」と述べた。

◆◆◆◆◆

大本東京本部では4月18日午後3時から、新型コロナウイルス終息祈願祭を執行した。同日、綾部・長生殿で教主さまご臨席のもと、同祭典が執行されることを受けて執り行った。

新型コロナウイルス感染防止に伴う東光苑の祭典・行事ついて

新型コロナウイルスの緊急事態宣言に伴い、下記のとおり5月末日までの東光苑での祭典・諸行事を自粛・縮小いたします。皆さまには、引き続きご理解・ご協力のほどお願い申し上げます。

天恩郷・梅松苑両聖地の祭典・諸行事つきましては、大本本部公式ホームページをご覧ください。また、皆さまには、くれぐれもご自愛いただきますようお願い申し上げますとともに、一日も早い終息をご祈願させていただきましょう。

5月4日(月)　教主生誕祭・三代教主・教主補聖誕祭
→　参拝をご遠慮願います

5月5日(火)　開教128年みろく大祭遥拝祭
→　参拝をご遠慮願います

5月10日(日)　東光苑月次祭
→　参拝をご遠慮願います
(10時30分からホームページで中継)

5月20日(水)　21世紀・生きがい講座
→　東京本部では開催しません
(19時からホームページで配信)

5月30・31日(土・日)　東光苑葬祭研修会
→　中止させていただきます

※6月14日(日)の東光苑月次祭での天声社出張販売は中止させていただきます

6月 東光苑祭典・行事予定

14日(日)午前10時30分～
東光苑月次祭・人類愛善会創立記念祭典
市杵島姫命例祭

20日(水)午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（大本東京本部）
地球で今、何が起こっているのか
～環境への取り組みと人類愛善運動～
講師　小林龍雄（人類愛善会理事）

28日(日)
みなづきの集い

※今後の状況により、延期や中止、祭典の参拝をご遠慮いただくなど、予定を変更する可能性があります。

教主さまから3点のお短冊を賜る
～コロナ終息に一層のご祈願を～

大本東京本部・東光苑が所在する首都東京では、新型コロナウイルス感染症の罹患者が3000人を超えました（4月20日現在）。全世界でも終息が見えない中、国民に対し、政府からの外出等の自粛要請も続いています。

そんな中、4月19日の聖師さまの日に、教主さまから「**光明来**」「**疫病退散**」「**無病息災**」の心強いお短冊を東光苑にご下附賜りました。

東京本部での世界平安安全祈願並びに新型コロナウイルス終息祈願の折にご神前にお供えしたのち、さっそく1階ロビーに掲示。このたびの大難を小難に乗り越え、一日も早く「光明来」となりますように、一層のご祈願につとめたく存じます。